

6.横顔

スランは悩んでいた。来週にも生まれる我が子の名前を、まだ決めきれないのである。



初めての子供だ。立派な名前を付けなければ…、との意気込みが空回りしてしまったか、どんな名前を当てはめてみてもしっくりこない。そもそも、今まで渡し守の仕事一筋で学もなく。人の親になることなど大して意識して生きてきたわけでもなく。そんな人間が、一人の人間が一生付き合うことになる呼び名を、勝手につけてしまうなど、おこがましいことなのではないか…?などという根本的な段階から嵌ってしまってちがが明かない。妻のマナには真面目過ぎと笑われている。父のオルカンも名前の価値など呼んでいるうちに出来ていくものだとして淡白だ。村医者の兄夫婦は、悩んでやること自体が大事なんだよ、と暖かい声をかけてくれるが、自分たちは半年後予定の第二子の名前を潮流か潮だともう決めてしまっている。釈然としない。大きくため息をついて、天を仰ぐ…



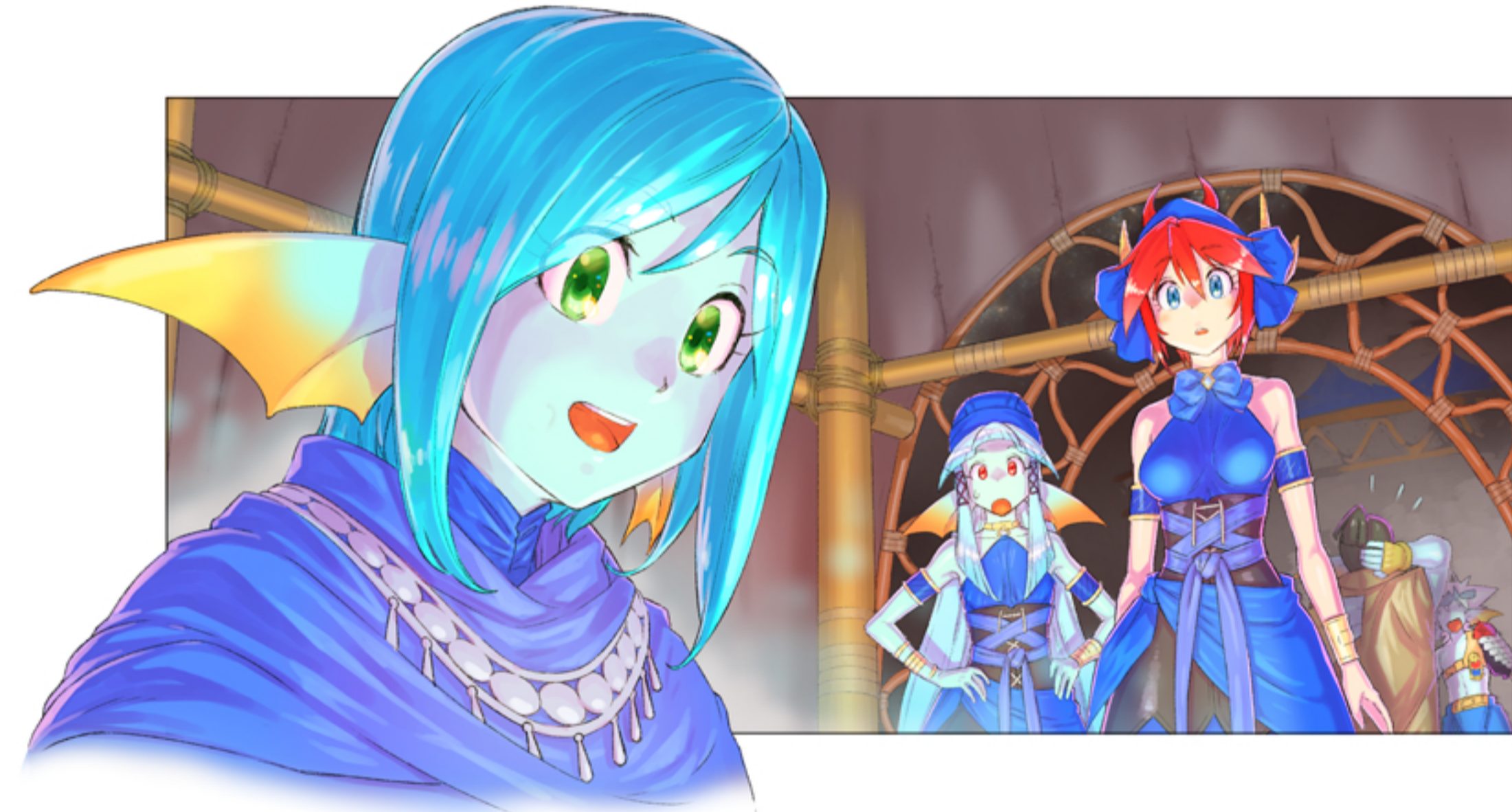
マナと初めて出会ったのは、渡し守の仕事上がりに仲間とくり出した、ヴェリナードの酒場だった。流しの歌姫としてステージに上がっていたその姿の、暗がりの中に浮かび上がった妖艶さになのか、力強くも透き通った歌声になのかかわからない。一目惚れをしていた…のだが、それまで舟のことが面白いばかりで、ろくに恋煩いなどしてこなかった身には、その時の自分の気持ちは分からなかった。分からないなりに、なにかと機会があるごとに、その酒場に通うようになっていた自分を顧みて、俺のような朴念仁にこんな助平心があったものかと、後から驚いた。

最初にマナが声をかけたのは、熱心なファンを少しからかってやろう、くらいのことだったのだろう。しかしひとの相性というのは不思議なもので、彼女にとっては自分を飾ることに汲々とする都会の若者よりも、不器用だが虚飾のない言葉で話す自分という方が気分のいいものだったらしい。

少しずつ交わす言葉が増え、いつしか二人で出歩いたりするようにもなり、出歩くようになり、また出歩いたり…だんだん彼女が不機嫌になってきた。せつかく自分から隙を見せてやっているのに、モーションをかけてこないお前にいら立っているのだぞ、と仕事仲間が翻訳してくれたのだが。理解不能である。理解不能だが、何とかしなくてはならない…!彼女は自分に何を望んでいるのだ?自分は彼女をどうしたい。どうなりたいのだ?海の仕事は過酷で、時に危険である。都会育ちの彼女にそんな覚悟を求めてもいいのか…?などと、煮詰まって頭がぐるぐるになった挙句、俺と一緒に海に沈んでほしい、と切り出してチョップを食らったのは痛い思い出である。

ともあれ、彼女と一緒にすることになり、渡し守を辞め村に帰り、漁師に戻って一年ほど。マナは田舎の生活にもけろりと馴染んで、漁師の奥さんをやるどころか、楽しそうに漁についてくることもある。歌姫の生活に未練がないのか気になったが、彼女はそういう漂泊に馴染んでいるようで、今面白いことをやるのがモットーらしい。自分はいまだに舟にしがみついているのに、ちもさちもいかにないのに、まことに不可解なことであったが、最近は無理に理解しないといけないことでもないのではないかと考えられるようになってきた。

そして、子供もできて…、そうだ、名前だ。考えに耽っているうちにいつの間にか妻とのなれそめを反芻してしまっていた。あの太陽のせいだ。俺がこんなに悩んでいるというのに、今日もウェナの太陽は、のんきに村の砂浜を照らして…。



そんな父の苦悩の思い出が、ほんのりと漂っているような、いないような。今日ものんきに太陽に照らされているルシナ村を、ソウラたちは久しぶりに訪れていた。冒険の骨休めに、マルチナが任された村への定期便に付き合ったのである。

村へ着くと、なんとミトナがセスリの子供を身籠っていた。日々退屈な田舎の村人たちは騒げるネタを逃さない。ソウラの帰省をダシにもう何度目かになるミトナの妊娠祝いの宴会が開かれた。宴会ばかり開かれるのに妊娠中はあれもこれも食べられなくなっちゃってさ、などと軽口をたたくミトナの横顔はしかし、女として充実してきている風格をほのかに感じさせて、アズリアもマルチナも内心たじたじになってしまった。女の子がお母さんになっていくダイナミズム…! 本当に素敵な、命の営みの一場面であるはずなのだが、先日のカルデア山道での一件でアビーの過去を聞いたアズリアは、単純に嬉しいという思い以外に、様々なことを考えてしまっていた。これから生まれる子供の人生にも、まあ色々あるのだろうが、かつてのアビーとその子のような悲惨な結末を迎えるようなことは、そうそうはないだろう。そういうことが心配なわけではない。ただこんな幸福な風景も、魔博士たちが経験したような残酷な仕打ちも、どれも同じ人の心から出てきていて、分かちがたいということが、あまりにも壮大で、圧倒されるのであった。ボクは、そういった、人の心の営みというものを…

ミトナとセスリー一家のお祝いをしているだけで村での日々は過ぎてしまい。帰途に就いたミーティア号に、伝令のドラキーが飛んできた。かなり久しぶりの、ユルールたちからの手紙だった。前に会ったときは、ユルール自身の出生にもまつわる、時空を超えた冒険をしていたとのことだったが、今はそれにも決着をつけて、今度は大魔王マデサゴラを失って戦乱の渦中にある魔界を統一するために、自らが大魔王になる資格を得るために駆け回っているらしい…

相変わらず理解不能スケールの冒険譚に、そろそろ適当な嘘をついてこちらをからかっているのではないだろうか…?などと疑い始めたソウラたちだったが、本題はそこではなかった。魔界における先の大魔王マデサゴラの出身国、ゴラ郷の彼のアトリエで、太古龍レムノンに関する作品と、メモが見つかったというのである。

表題は「分かたれし夢幻の龍レムネアと悪夢の龍レムナス」

かつてアストルティアへの侵攻を企図し、準備と調査を進めていたマデサゴラが、レンダーシアで生まれかけの太古龍を発見し、それを2体の龍に作り変えたというのである。